（9月例会「コレクション紹介」より）

1965 年お年玉切手シートのインク流れ

永吉 秀夫

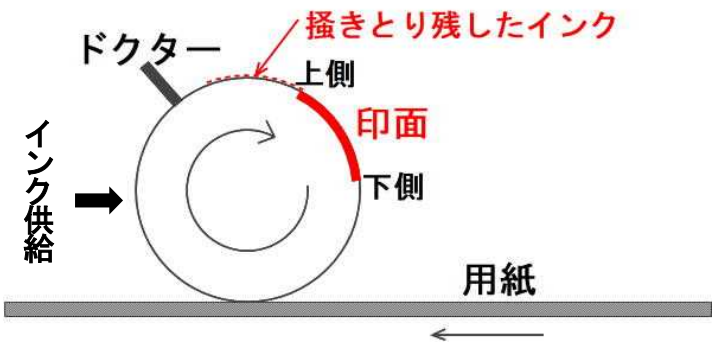
1960 年頃から後のお年玉切手シートは世の中にあふれかえっていて、今さらコレクション用に買い求める人はなかなか現れません。金券屋さんに持っていっても、額面 5 円（×4）時期のものなど、まず相手にしてもらえないでしょう。

しかし少しでも「変なところ」のある品なら、筆者のような物好きが飛びつきます。下の写真の 1965 年「麦わらへび」、緑のインクが上向きの流れていることはどなたにもおわかりいただけるでしょう。問題はそこに価値を見いだせるかどうかです。めったに見ることのない印刷不良品ですが、エラー切手としては大金を支払うほどのものでありません。

このインク流れは、円筒上に製版されたグラビア版面の凹みにインクを詰めてから鋼鉄製の薄刃（ドクターナイフ）で余分なインクを掻き取ったとき、掻き取られたインクが版面に残った状態で印刷したために生じたものです。下の解説図を見ればわかるように、インクが上向きに流れているということは、用紙上に印面の下側→上側の向きに印刷されたことを意味します。

文献によると、このお年玉切手シートは周長 561 ミリの円筒上に、周方向に 6 面、軸方向に 2 面を並べた 12 面構成で製版されたとされています。従って印刷がシートの上下方向になされたことはわかるのですが、「下側→上側」、「上側→下側」いずれの向きに印刷されたのかまで、この文献には書かれていません。それが今回の紹介品によって明らかになったわけです。

エラー切手の類は、もちろん珍しいから手に入れたくなるのですが、そのエラーによって正常な製品としての切手を見ているだけではわからないことが見えてくる、という点にも目を向けたいものです。その意味で、今回の紹介品は目打もれのような派手なエラー切手より有意義ということができます。



文献

大蔵省印刷局監修『郵便切手製造の話』（印刷局朝陽会、1969 年）